

<研究ノート>

モンゴル語文法研究ノート(1) Some notes on Mongolian grammar (1)

風間 伸次郎
Shinjiro Kazama

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Tokyo University of Foreign Studies

要旨: 本稿は主に Kullmann and Tserenpil (1996) と岡田・向井 (2006) の記述や例文をコンサルタントと検討する中で見いだされたいくつかの問題点や、その問題に関するコンサルタントの内省を記しておこうとするものである。必要に応じて若干のコーパス調査や他のアルタイ諸言語、日本語との対照言語学的考察も行う。

Abstract: This paper mainly describes the problems found while discussing the descriptions and example sentences of Kullmann and Tserenpil (1996) and Okada and Mukai (2006) with the native consultants, and the introspection of the consultants regarding the problems. If necessary, some surveys and contrastive considerations with other 'Altaic languages' and Japanese will be conducted.

キーワード: ハルハ・モンゴル語, 内省, コーパス, アルタイ諸言語, 聞き出し

Keywords: Khalkha Mongolian, introspection, corpus, Altaic languages, elicitation

1. はじめに

本稿はハルハ・モンゴル語(以下では単に「モンゴル語」とする)の文法に関して、主に Kullmann and Tserenpil (1996) と岡田・向井 (2006) の記述や例文をコンサルタントと検討する中で見出した問題点や、その問題に関するコンサルタントの内省を研究ノートとして記録しておこうとするものである。必要に応じて若干のコーパス調査や、他のアルタイ諸言語および日本語との対照言語学的考察を行う。協力して下さったコンサルタントの方の生年や出身地の情報は下記のとおりである。内モンゴル出身の話者の方には、もし内モンゴルで当該の文法形式の使用(頻度)や機能に違いがある時には、その点について御教示をいただいた。査読者のお一人の方は内モンゴルのモンゴル語に堪能な方であるらしく、内モンゴルでの状況に関するコメントをたくさん下さった。ただ覆面の査読者の方に情報元の話者の詳細を何う訳にもいかず、内モンゴルでの状況に関する情報の確認はもっぱら H 氏にお願いした。

表1: コンサルタントの情報

	コンサルタント	生年	出身地
モンゴル国	O 氏	1987	Ulaanbaatar
	J 氏	1989	Övörxangaj
内モンゴル	H 氏	1985	Bajannuur



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

なお本稿の一部については、2018年12月15日に行われた東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の共同利用・共同研究課題「モンゴル諸語における言語変容—外的要因と内的要因—」の2018年度第2回研究会で発表し、そこでモンゴル語を専門とする研究者の方々から貴重なコメントを多く賜った。ここではその個々のお名前を挙げることはしないが、記してお礼申し上げたい。そのコメントを参考にさせていただき、情報を追加し、また推敲を行ったが、なお不十分な点も多くあると思われる。研究ノートとしての性格上、考察がまだ十分にできていないと思われる問題についても広く浅く取り上げることにしたが、筆者の先行研究の無知からくる不十分な記述や、調査・検討の不十分な点等もあると思われる。今後、御批判・御指導いただければ幸いである。さらに本稿では、時間的制約その他の原因から、例文にグロスをつけることができなかった。研究ノートの段階の論考として、御容赦いただければ幸いである。

モンゴル語の文例等はキリル文字による正書法からローマ字に翻字して記した。その翻字は次のような方式に拠っている： a=a, б=b, в=v, г=g, д=d, e=je, ё=jö, ж=ž, з=z, и=i, й=j, к=k, л=l, м=m, н=n, о=o, ө=ö, п=p, р=r, с=s, т=t, у=u, ү=ü, ф=f, х=x, ц=c, ч=č, ш=š, ш=šč, ь=’, ы=y, ь=’, э=e, ю=ju, я=ja。特にことわらない限り、先行研究における表記も基本的に本稿による方式に統一していることに注意されたい。文例の文頭には大文字を用いたが、語や句の例の頭には大文字を用いていない。なお形態素内の母音が大文字で記されているものは、母音調和による異形態があることを示している。モンゴル文字の翻字による文語表記での大文字の子音 K は k~q の異形態のあることを示している。

2. 文法的な諸問題とそれに対するコンサルタントの内省による分析

以下では12の文法的諸問題を扱う。取り上げた問題点は良く言えば多岐にわたっているが、相互にあまり関連性のないバラバラなものとなっている。この点、御了承いただければ幸いである。2.1.~2.4. では名詞や代名詞に関連する文法的問題、2.5.~2.8. では動詞に関連する文法的問題、2.9.~2.12. では複文に関連する文法的問題を扱っている。

2.1. 「指小辞」-xAn

一般に指小辞というものはもっぱら名詞を中心とした語につくものであるが、モンゴル語におけるこの接辞は（少なくとも共時的には）基本的に名詞につかないものであるようだ。本節では主にこの点を問題にする。

Janhunen (2012: 97) は、-xAn を「名詞からの」(denominal) 派生接辞とし、「小さい物もしくは女性」(‘small objects’ or ‘female being’) を示す形式であるとしている。例には xüü 「少年」に対する xüü-xen 「少女」¹ を挙げている。さらに Janhunen (2012: 119) では、この「名詞からの」(denominal) な接辞は形容詞が中位の程度であることを示す (moderative adjective) 機能にも用いられるとし、serüün 「涼しい」— serüü-xen 「やや涼しい」、amar 「穏やかだ」— amar-xan 「やや穏やかだ (rather peaceful)」(ただし小沢 (1983: 18) は「簡単な：(挨拶用語として) 元気な」としている、コンサルタントの考える意味も同様で

¹ コンサルタントによれば、現在のウランバートルにおいて xüüxen は、主に25~30歳ぐらいの女性を指し示すのに使うため（さらに50歳ぐらいでも容姿のきれいな女性には使う）、16歳（~22歳）ぐらいの年齢の女性を xüüxen と言うと、失礼な感じを与えることがあるという。本来「成人しても結婚していない女」の意であると思われるが（小沢 (1983: 510) にもそうある）、現在では結婚した女性にも使うことがあるという。高校生ぐらいまでの女の子には一般に oxin を使うという。年輩の人には広く xüüxen を使う人もいるという。「(親にとっての) 娘」の意味もあり、呼びかけの時には、田舎などでは年配の人が名前のわからない子供を呼ぶ時に使うことがあるという（この場合、その子供は男の子でもよいという）。この意味は xüüxed の単数形に近い意味の語として捉えられているものと考えられる。

ある)の例を示している。岡田・向井 (2006) 〈形容詞・副詞のさまざまな表現〉² は「よく使われる形容詞・副詞の中には、むしろこの接辞が接続した形のほうが頻繁に使われるようになった結果、接辞がない場合と同じ意味に戻っているものも少なくありません」と述べ、次のような例を挙げている(訳や説明も岡田・向井 (2006) による、以下も特にことわらない限り、岡田・向井 (2006) の例文の訳や説明は岡田・向井 (2006) によるものである、太字・下線・例文番号は筆者による、以下でも同様)。

- (1) *zižig* 「小さい」 = *zižigxen* 「小さい」(語幹と同じ意味で使われる)
- (2) *bogino* 「短い」 = *boginoxon* 「短い」(同)
- (3) *ojr* 「近い」 = *ojrxon* 「近い」(同)
- (4) *cever* 「清潔な」 = *ceverxen* 「清潔な」(同)

Janhunen (2012: 129) では、この「名詞からの」(denominal)な接辞は基数詞および概数詞形につき、限界的機能 (delimitative function ‘only’) を示すとし、*arav-xan* 「10 だけ」、*arv-aad-xan* 「約 10 だけ」の例を挙げている。

たしかに *-xAn* は指小性を示す要素と言ってもよいと考えるが、この接辞は(少なくとも共時的には)基本的に名詞につかないものであるようだ。他方、上記のように形容詞、数詞につき、さらに下記のように指示詞、副詞などにもつくようだ。この点で Janhunen (2012) が ‘denominal’ 「名詞からの」派生接辞であるとしている点には問題があると考え。コンサルタントの内省によれば、モンゴル語の時の副詞では、*odooxon* 「ほんの今しがた」、*sajaxan* 「たった今、最近」、*önöōxön* 「最近、近頃、今しがた」、*xurdxan* 「速い、速く」(コンサルタントによれば、*xurdan* とあまり程度は変わらない感じであるという)、*önöödörxön* 「ほんの今日のことで」、*ertxen* 「幾分早く、かなり早めに、かなり以前に、前もって」などのような *-xAn* のついた形が使われ、場所の副詞では、*tijšxən* 「あそこらへん、あっちだけに」が、程度の副詞でも *ödiixön* 「これだけ (少ない)」、*tijmxen* 「まあまあな」などが使われるという。

名詞につく例外的な例としては、*narxan* 「お日様」(子供の本などに見られる)、*gacuurxan* 「小さいクリスマスツリー」(<*gacuur* 「針縦 (はりもみ)、子供向けの有名な歌に出て来る) などが挙げられる。どちらも内モンゴルでは使わないという。したがってこれはロシア語からの翻訳借用である可能性が考えられる。他方、人名などにはロシア語の影響はないようで、人名などでは *-čik(a)* (ロシア語の指小接辞) をつけるなどして、指小辞のついた形式全体をそのままロシア語から借用しているようだ。*mor'xon* 「小さい、かわいい馬」という形式も聞くことはあるが、それほど使われないという。その他、小説や詩に *xongorxon* 「かわいい恋人」、*janagxan* 「かわいい恋人」という語が出てくるといふ。ただし *xongor* は小沢 (1983: 474) では「[形・名] 清浄無垢の [人]; 恋しい [人], 愛する [人]」であり、*janag* は同じく小沢 (1983: 610) では「[形] 愛らしい, 可愛い etc.」となっているため、派生元は共に形容詞であるとみることもできる。なおコンサルタントによれば、*xongorxon*, *janagxan* のいずれも男から女を呼ぶのに用いる頻度の方が高いが、女から男に対しても使えるという。したがって Janhunen (2012) がこの接辞の機能として ‘female being’ を挙げている点も問題である。コンサルタントによれば、Janhunen (2012) の示している例である *xüü-xen* 「少女」に対して、現在、指小辞として分析されるような意識は全く感じられないという。なお小沢 (1997: 90) ではモンゴル文語における *-KAn* (*-xAn* の文語表記) について、これを基本数詞に接尾し「指小数詞」を形成するものとし、他方で「若干の実詞に接尾されて、愛称的・指小的意味を表す語を作ることもある」としている。そこで示されているのは *keü* 「男の子」> *keüken* 「可愛い男の子→女の子、乙女」、*noyan* 「貴族」> *noyaqaŋ* 「貴族の娘、一般に身分のある娘」の2例であり(訳と説明も小沢 (1997) による、順に *xüü*, *xüüxen*, *nojon*, *nojoxon* の文語表記であ

² 岡田・向井 (2006) については、〈〉内に「ステップ名」を記した。

る), いずれも女性の名詞を派生する例となっている。さらに岡田・向井 (2006) 〈形容詞・副詞のさまざまな表現〉が -xAn について次のように記述している点が注意を惹く。すなわち, (-xAn は) 「文脈や形容詞・副詞の種類によっては, その形容詞・副詞そのものではなく, 被修飾名詞のほうに対する指小を表す場合があります。日本語に訳す方法はありますが, 指小されているのがあくまでも名詞であることに注意が必要です」とし, 次のような例を示し, 次のような訳と説明を与えている。

(5) cagaan bajšin 「白い建物」 > cagaaxan bajšin 「白くかわいい建物 (『少し白い建物』ではない)」

(6) amttaj xool 「おいしい料理」 > amttajxan xool 「おいしくて素敵な料理 (『少しおいしい料理』ではない)」

モンゴル国の話者2名によれば, やはりこのような意味になるという。しかし内モンゴルでは (5) の cagaaxan は「白っぽい (色)」, (6) の amttajxan は「まあまあおいしい (料理)」を意味するという。すなわち, 内モンゴルにおいては形容詞に付いた指小辞に程度を弱める働きがあるということになる。

もし名詞の方に指小辞がつけられるのなら, 上記のような例では名詞に指小辞をつければよい, と考えられるが, 実際にはそうなるはずで, 形容詞の方に -xAn がつく形となっている。したがってこのこともモンゴル語の -xAn が名詞にはつきにくいということの間接的に示唆しているものと考えられる。

よく知られているように, モンゴル語において, 形態的には名詞と形容詞と数詞と副詞の間には明確に線を引くことができない。したがって, 指小辞が形容詞や数詞, 副詞につくとしても何も問題がないわけであるが, 他方, 名詞の方にほとんどつかない, という点については説明が難しいと考える。

なお他のアルタイ諸言語での状況を見ると, まずツングース諸語では (名詞はもちろんだが) 形容詞や数詞などにつく (筆者調査による)。トルコ語では名詞の他に形容詞にもつき, 数詞については少なくとも bir 「1」, iki 「2」についての例が確認できる (Göksel and Kerslake (2005: 60), TS CORPUS による)。まれに「急いで」を意味する副詞 çabuk に対する çabucak 「とても急いで」も使われるという (Göksel and Kerslake (2005: 60))。

2.2. 1人称複数代名詞の包括的用法

1人称単数の「私」と2人称単数の「おまえ」からなる1人称複数を表現するのに, 日本語であれば「私とおまえの二人」と表現する。これに対し, ロシア語には *my s toboj* 式の表現, すなわち「lit. 私たちとおまえ」のような表現があるが, モンゴル語にもこれと同様の表現がある。

(7) Düü bid xojoyryg xašgirmagc aav <Čimeegüj> gež xelev. 「弟/妹と私 (lit. 弟/妹(と) 私たち) の二人が叫ぶと父は『静かに』と言った。」 (Kullmann and Tserenpil (1996: 164))

内モンゴルでもこのように言うという。このような場合には, *Düü bi xojoyryg* 「lit. 弟/妹(と) 私二人を」とはモンゴル国でも内モンゴルでも言わないという。なおロシア語では *ja i ty* 「lit. 私とおまえ」のように表現することができる。

2.3. 無生の疑問代名詞 juu「何」の対格形

モンゴル語では目的語が動詞直前の位置にあり特定できない場合, 目的語は対格接辞をとらず, 何もつかない形で現れる (いわゆる不定対格形)。他方, 特定できる対象で主語に関係するものではない場合, (定)対格をとる。対格には異形態があり, 長母音, 二重母音で終わる語と *n* で終わる語の一部には -g, ž, č, g で終わる語には -ijg, i, ' で終わる語では i, ' をとって -ijg がつき, それ以外の語では母音調和にしたがって -yg / -ijg がつく (以上の記述に関しては例えば山越 (2012: 62-64) を参照されたい)。

こうした状況において, juu「何」という語は対格の取り方に下記のような不規則な面を示す。これ

は、特に他動詞文で無生物主語を嫌う³モンゴル語において *juu* 「何」という語は基本的に斜格、特に目的語で現れ、それが示す意味からいって基本的に不定の性格を持っているためであると考えられる。本節ではこの問題を扱う。

Janhunen (2012: 207-208) は、+human の疑問代名詞 *xen* 「誰」が対格形になるのに対し、non-personal な疑問代名詞 *juu* (Janhunen (2012) の表記は *yuu/n*) はふつう無語尾 (unmarked) で目的語として用いられる (ただし対格形 *yuu/n-ii.g* も確認されている) としている。そこではさらに *xen ol-son be?* 「誰が (それを) 見つけた?」と *xen-ijg ol-son be?* 「(おまえは) 誰を見つけた?」のように最小対的な対立を示す例文を挙げ、他方で *juu baj-na ve?* 「何がある?」と *juu xij-ž baj-na ve?* 「(おまえは) 何をしている?」の例文を示している (Janhunen (2012: 208))。Kullmann and Tserenpil (1996: 271) には *juu* 「何」の諸格変化形を例文によって示しているが、目的語となっている例には無語尾の *juu* の例 (*Ter juu asuusan be?* 「彼は何を訊いたのか?」) が 1 例あがっているのみである。これに対し、岡田・向井 (2006) 〈対格と不定格〉では、諸代名詞の対格形についての一覧表を示しているが、そこでは *juu* 「何」の対格形を *juug* としている (塩谷・中嶋 (2011: 197) も同じく *juug* としている)。一方で岡田・向井 (2006) 〈対格と不定格〉は、「疑問代名詞の *juu* (まれに *xen* 「誰」も) はそのままの形で対格の意味を表すことがあります。これはあくまでも一種の省略であり、不定格とは異なります」と記述し、次の例文を示している。

(8) *Či saja juu avav?* 「さっき何買った? (定)」

コンサルタントに訊いてみると、まず上の文に対格をつけて言うことはできないという。

(9) **Či saja juug avav?*

さらに目的語を全く不定のものにした次のような文でもやはり対格をつけて言うことはできないという。

(10) **Či juug avax gež bajгаа yum be?*

(11) *Či juu avax gež bajгаа yum be?* 「おまえは何を買うつもりなのか?」(コンサルタントによる作例)

したがって岡田・向井 (2006) 〈対格と不定格〉は「一種の省略」としているが、少なくとも単なる「省略」とはみなせない目的語の *juu* がある、ということになる。一方、3 人称小辞を後続させれば対格形を使うことができるという。

(12) *Či saja juug(ij) n' avav?* 「おまえは (さっきあったあの物の中から) 何を買ったのか?」(コンサルタントによる作例)

ただしコンサルタントによって微妙にその判断は異なり、書く時には *juug n'* と書く者と *juugij n'* と書く者がある。しかし話し言葉では *juugij n'* と言う方がより自然であるという。しかし 1 名はさらにこの *juugij n'* の *ij* の部分は発音されない感じがするという。なお 2 名とも *juugijg n'* とは言えないという。ただし上記の文が意図する意味を言うもっとも自然な文は *Či saja alyg n' avav?* 「おまえは (さっきあったあの物の中から) どれを買ったのか?」であるという。

岡田・向井 (2006) 〈人称関係助詞〉では、*n'* などの人称小辞が対格語尾の後ろに置かれる時、「長母音・二重母音で終わる語幹に接続された対格語尾のあとに *ij* が挿入されることもある」としており (例えば *xüü-g-ij n'*, *noxoj-g-ij čin'*, *xüü* 「子供」, *noxoj* 「犬」), 上記の要素 (*ij*) はこれであると考えられよう。

岡田・向井 (2006) 〈疑問代名詞の特殊な用法〉はさらに「事物をたずねる疑問代名詞 *juu* 「何」は、

³ 風間 (2016: 87) を参照されたい。

直接目的語として対格をとる場合でも対格語尾を省略することがありますが、助詞 *č* を後続するときにはその省略が顕著になります」と述べ、次の例を示している。

(13) *Bi odoo juu č uuxgüj*. 「私はもう何も飲みません。」

コンサルタントによれば、少なくともこの文で *juu* に対格をつけることはできないという。

(14) **Bi odoo juug č uuxgüj*.

これに対し、目的語の後ろに3人称の人称小辞を置き、*Bi odoo juug ni č uuxgüj*. とすれば、モンゴル国でも内モンゴルでも言えるという。これはその発話場面に選択肢としての具体的な飲み物が存在する場合にのみ発話可能であるという。(14) は内モンゴルでも言えなくはないが少し変であるという。査読者の方は、「内モンゴルでは発話可能であり、強い意志を表す」というコメントを下したが、この文の適格性及び解釈に関しては内モンゴル内部でもさらに方言差のあることが考えられる。なおモンゴル国でも、書き言葉としては(14)のような文が存在している可能性があるという。

Juu l avav gež. 「何も買うわけがないだろう。」のような文は反語(もしくは修辭疑問文)の例であるが、このような場合にも対格は現れることができないという。

(15) **Juug l avav gež*.

コーパス (Mongolian Corpus) を検索してみると、*juug* は49例、*juugij n'* は14例、*juug n'* は2例、*juu* は3,129例、*juu č* は573例であった。したがってやはり対格を伴った *juu* の頻度は非常に低いことがわかる(なお *juu* や *juu č* の例には自動詞主語なども多く含まれている点に注意する必要がある)。*juug* の49例の中には、*juug č* となるものが多く、23例あった。したがって *č* の前に対格形 *juug* は現れないわけではないということがわかる。その中にはさらに否定が後続する例もあるが、必ずしも多くない。なぜ *juug č* となるものが多いかについては、現時点では適切な説明をすることができていない。なお Janhunen (2012: 207) は、*yuu/n-ii.g* も確認されているとしていたが、コーパスからは1例も検索されなかった(コンサルタントによれば、キリル文字で書くとしたら *yuunyg* (翻字による) となるはずだが、やはりこのような形式は見覚え/聞き覚えがないという)。

コーパスから得られた *juug* の例は例えば次のようなものであるが、この例における *juug* の対格を落として *juu* としても特に問題はないという。

(16) *Bi üünees öör juu(g) xelex ve?* 「これ以上私は何を言うことがあろうか?」

なお、コンサルタントによれば *xen* 「誰」を対格なしで目的語として用いている例は全く思いつかない、という。

2.4. *n'* を伴って、聞き手から見た話し手の立場を示す名詞

岡田・向井 (2006) 〈人称関係助詞〉によれば、次のような文における *Eež n'* は話し手が自分のことを指すのに用いるという。つまり「聞き手から見た自分の立場」であるが、人称小辞(岡田・向井 (2006) の用語は「人称関係助詞」)には2人称ではなく、3人称のもの (*n'*) が使われるという。

(17) *Eež n' udaxgüj očloo*. 「お母さんはもうすぐ着くよ。」

なお3人称の人物のお母さんである場合には、動詞が伝聞の形になるという。話し手(1人称の人物)自身の母親と解釈することはできないが、2人称の人物の母親とする解釈も可能であるという。

(18) *Eež n' irme gene*. 「(あの人の/あなたの) お母さんが来るそうだよ。」(コンサルタントによる作例)

岡田・向井 (2006) 〈人称関係助詞〉によれば, この用法でよく使われる名詞は, 「家族・親族関係を表すもの (övöö「おじいさん」, emee「おばあさん」, aav「お父さん」, eež「お母さん」, ax「お兄さん」, egč「お姉さん」, düü「弟/妹」, nöxör「夫」, exner「妻」, xüü「息子」, oxin「娘」など) や, 社会的関係を表すもの (bagš「先生」, najz「友人」, xögšin「友人」, ax「年上の男性」, egč「年上の女性」, düü「年下の男女」など) であるという (訳も岡田・向井 (2006) による, なおこれらは基本的に呼びかけに用いることができる語であるようだ)。ただし, 「使われる名詞の範囲には個人差もある」という。

しかしコンサルタントによれば, まず nöxör n'「夫」と exner n'「妻」, は全く使われない, 聞いたことがないという。言えば冗談になるのではないかとのことである。

さらに xüü「息子」, oxin「娘」のように年下の家族である名詞では使用にやや制限があるという。すなわち, 毎日一緒に住んでいる息子などであればやや使いにくい。

(19) **Xüü n'** udaxgüj očloo. 「(あなたの) 息子 (である私) はもうすぐ着くよ。」 (コンサルタントによる作例)

例えば上記のような文であれば, しばらく会っていなかった, というニュアンスが感じられるという。例えば何年も留学している息子が自分の母に, もうすぐ帰ることを留学先から伝えるような場合などに使う感じがするという。ただその使用は人によって異なり, よく使う人もあまり使わない人もいう。離れている時間を長く感じるかどうかについても, もちろん個人差は大きいだろうという。一般にこのような言い方は, 話し相手の人物に対して優しい気持ちを込めた表現になるという。

日本語では人称代名詞の使用範囲が狭く, 使えばよそよそしい感じを与えるため, 特に小さい子供に対して年上の親族が話し手である自分のことを親族名詞を用いて言うことがある (例えば「おじいちゃんがやってあげようか?」, 「お父さんが持ってあげようね。」のように)。しかし年下の親族を指す親族名称にはこのような用法がない。モンゴル語でも年下の親族を指す親族名称の使用の方により制限があるのではないだろうか。ただし年下や同年配でも, 親族以外を指す名詞, すなわち najz「友人」, xögšin「友人」, düü「年下の男女」などでは普通に毎日会っている関係でもこうした用法で用いることができるという (上記の名詞の各語の訳も岡田・向井 (2006) 〈人称関係助詞〉による)。

(20) **Düü n'** udaxgüj očloo. 「(あなたの) 弟/妹 (である私) はもうすぐ着くよ。」 (コンサルタントによる作例)

2.5. 授受動詞による補助動詞的表現における求心的方向の授与表現

Kullmann and Tserenpil (1996) は次のような例を挙げている。

(21) Či bosongoo ajagy min' **avaad al'**! 「おまえ, 立って行くついでに私の茶碗を取ってくれ!」 (Kullmann and Tserenpil (1996: 172))

ここで al' は不変化詞であり, 小沢 (1983: 18) はこの語の意味を「下さい, ~して下さい」としている。この形式は, 家族内など親しい間柄で年上からの命令に使われるという。この文では al' の代わりに ög (ög-「与える」の語幹命令形) を使っても意味はあまり変わらないという。しかし, 次の例のように日本語の「やる」と「くれる」に当たる対立を生む場合がある。

(22) Či bosongoo ajagy n' **avaad al'**! 「おまえ, 立って行くついでにあの人の茶碗を取ってくれ (私に) !」 (コンサルタントによる作例)

(23) Či bosongoo ajagy n' **avaad ög'**! 「おまえ, 立って行くついでにあの人の茶碗を取ってやれ (あの人に) !」 (コンサルタントによる作例)

ただし内モンゴルでは文脈によっては(23)の文を「あの人の茶碗を(私に)取ってくれ」という意味に解釈することが可能であるという。

このように *al'* は副動詞形 V-AA_d に続けて恩恵を示す補助動詞的に用いられるのであるが、その恩恵はあくまで話者に向かう求心的なものとなる。他方、*ög-*「与える」の方は中立的であり、ここでは非求心的(もしくは遠心的)、つまり話者以外の人物へその恩恵が向かうものと考えることができる。現代日本語における「やる」は話し手から遠ざかる方向の授与(遠心的方向の授与)に用いられ、「くれる」は話し手に向かって来る方向の授与(求心的方向授与)に用いられる(日高(2006: 186))。両言語とも述語に人称変化を持たないが、このように授受を表す形式における対立が補助動詞もしくは補助動詞的に他の動詞に後続する形で用いられることによって、文中に主語が明示されていない状況において人称変化の不在を補って働いている面があると考えられる。なおモンゴル語におけるこの *al'* はかつて動詞語幹であったものようで、(モンゴル語と系統関係にある)契丹語には *aliv* という形があるという(大竹 p.c.)。同じくモンゴル語族の言語であるダグール語には「受け取る」などの意味を示す *alibei* がある(恩和巴图(1983: 4))。なお Tsintsius i dr. (1975: 26-27) によれば、「取る」「(手を)差し出す」などの意で全ツングースに同源語があり、モンゴル文語の語形も比較されている。チュルク諸語にも一般に *al-*「取る、買う etc.」のあることが注意される。

2.6. 移動動詞の有生性に関する主語の制限(日本語等との対照意味論)

Kullmann and Tserenpil (1996) は次のような例を挙げている。

(24) *Margaas ene tanximd tögöldör xuur **bajx bolno.*** 「明日このホールにピアノが来る。(lit. 明日にはこのホールにピアノがあるようになる)」(Kullmann and Tserenpil (1996: 192))

日本語では上記のように「来る」を用いた表現が可能であるが(筆者の内省による、なお筆者は1965年東京生まれの日本語母語話者である)、コンサルタントによれば例文(24)のような意味を表現する場合にモンゴル語で *ir-*「来る」を使うことはできないという(なおこの文自体、教科書的で硬い文体の文であり、話し言葉で言うのは変であるという)。したがってモンゴル語では無生物主語の行為として *ir-*「来る」を用いることはできないのではないかと考えた。ふつうの口語では *avčra-*「(人が)持って来る」を使わなければならないという。*or-*「入る」を使うこともできないが、使役形にした *or-uul-* を用いて表現することはできる。ただし、人が持って来ることがわかっていれば、*ir-*も使えると判断された。

さらに、日本語では「私の本がどこかへ行ってしまった。」と言うことができるが、モンゴル語でやはり下記のような文を *jav-*「行く」を用いて言うことはできず、*dald or-*「隠れた。(lit. 見えないところに入った)」を用いて言うという。

(25) *Minij nom **alga bolčixžee.*** 「私の本がなくなってしまった。」(Kullmann and Tserenpil (1996: 198))

ir-「来る」よりも *jav-*「行く」の方が、このような有生性に関する制限(おそらく、さらに正確には主語が人間でなければならないという制限)は厳しいようだ。コンサルタントによれば、*Xavar iržee/irlee.* 「春が来た」は言えるが、「春が去った」という意味に対しては、**Xavar javčičee/javčilaa/javlaa/javžee.* などと言うことはできず、*Xavar duuslaa.* 「lit. 春は終わった」と表現するという。*Xavar javlaa.* と言うと、「春になったら(誰か人間が)行った」の意味に解釈されるだろうという。ただ小沢(1983: 605)には *Cag zöv javž bajna.* 「時計は正確に作動している」の例があるので、その動きが視覚的に捉えられるものには *jav-* 用いることができるのかもしれない。なおトルコ語では *Yaz gitti.* 「夏が去った」の例がある(竹内(1989: 149)による)。このような移動動詞の意味論に関しては、対照的観点のみならず、今後大規模コ

一パスから大量の例を得てその主語を分類してみるなど、多角的にかつ深く掘り下げていく必要があると考える。

2.7. 近未来を意味する過去終止形の使い分け

Janhunen (2012: 158) や Kullmann and Tserenpil (1996: 187) をはじめとする多くの先行研究では -IAA に近未来の用法があることを指摘している。他方、岡田・向井 (2006) 〈テンス(4) 非過去〉では「(近未来)の用法では、とくに -laa がよく使われますが、-žee による近未来テンスも見かけることがあります」とし、次のような例文を挙げている。

(26) Odooxon očloo. 「今すぐに行きます。」

(27) Bi ingeed⁴ üxžee. 「私はもうすぐ死にます。」

コンサルタントにこの下の文 (27) が使用される状況／文脈について訊くと、例えば父親の車を無断で使ったのだが、事故でその車を大破してしまったような場合で、「父親にひどく叱られる、困ったなあ」と感じた時に発話するのだという。なおそのような場合に **Bi ingeed üxlee.** とは言わないという。他方、もし火事や強盗などの災難で本当に生命の危機に晒された場合に直接的・主観的な判断を表現するのは **Bi ingeed üxlee.** であると言う。

他方、上記の **Odooxon očloo.** の代わりに -žee を用いて言うことはできないという (***Odooxon očžee.**)。「(私はお腹が空いて)死にそうだ」のように主観的な感情を表現する場合にも、(bi ölsöz) **üxlee.** と言い、**Üxžee.** と言うことはできないという。こうした近未来を示す -žee について、コンサルタントにはさらに次のような使用例を示してくださった。

(28) **Bi ingeed aluulžee.** 「私は今にも殺される、殺されそうだ。」(コンサルタントによる作例)

(29) **Bi ingeed duusčee.** 「私は今にも終わりそうだ。」(コンサルタントによる作例)

査読者からも指摘をいただいたが、文の主語は1人称に限られるわけではなく、モンゴル国でも内モンゴルでも2人称や3人称が主語の文も可能であるという。ひどく叱られるというような状況で使う場合もあれば、危険な状況であることを感知して話す場合もあるという。

今後のさらなる研究を必要とするが、本稿において現時点では、「主語にとって困った状況が生じるということ」をより話し手が客観的に判断した場合に、このような -žee による近未来が用いられるものと分析しておく。

2.8. 副動詞形と補助動詞の接続などについて

岡田・向井 (2006) 〈補助動詞〉は -njad- 「【V】することができない, 【V】しきれない」とし、以下の例文を挙げている(日本語訳も岡田・向井 (2006) による)。

(30) **Tesen jadan xüleene.** 「待ちきれずに待つ。」

(31) **Tüünijg üzen jadaž bajna.** 「彼を見ることができないでいます。(嫌っているの意)」

岡田・向井 (2006) 〈補助動詞〉は補助動詞のうち「よく使われるもの」の1つとしてこの形を挙げている。そこにあがっている他の補助動詞は先行する副動詞形に -ž を取るものばかりであるのに対し、jad- については -njad という形のみが掲載され -žjad- という形は挙げられていない。

⁴ 査読者の方より「ingeed の代わりに odoo をよく使う」というコメントをいただいたが、本稿のコンサルタントによれば内モンゴルにおいてそのどちらも使われるという。ただし、たしかに odooの方が使用頻度は高いと思われるという。

しかしコンサルタントによれば、-ž jad- も高頻度で使われるという。コーパスで検索すると、-n jad- は 187 例、-ž jad- は 382 例であったので、むしろ -ž jad- の方が多いという結果になった（これはやや荒っぽい検索の仕方であるので、いわゆる「ゴミ」も混じっている点で注意が必要だが、全体的な傾向をみるためには十分な数字であると考えられる）。小沢 (1983: 606) でも -n jad- が 1 例、-AAd jad- が 1 例しかあがっていないのに対し、-ž jad- の用例は 4 例あがっている。コンサルタントによれば、常に両方とも使えるわけではなく、動詞やその他の文脈要素によっておおよそどちらを使うかは決まっているという。したがって今後その条件を明らかにしていく必要がある。

岡田・向井 (2006) 〈補助動詞〉は -x gež baj- 「【V】するところだ」、-x geed baj- 「【V】しようとしている」、-xaar zavd- / -xyg zavd- 「【V】しようとする」という表現形式を示し、それぞれに下記のような例を挙げている。

(32) Garax gež bajna. 「出かけるところだ。」

(33) Tamxi tatax geed bajna. 「煙草を吸おうとしています。」

(34) Zugtaxaar zavdaž bajsan. 「逃げようとしていた。」

なお (32) の文には主語がないが、1 人称でも 3 人称でも、誰が主語でもこの文は成立するという。

-xAAr zavd- / -xYg zavd- に関してはさらに「動作主がモノやコトである無意思動詞には接続しません」とし、次の例が非文であることを示している。

(35) *boroo oroxoor zavd- (意図した意味) 「雨が降ろうとしていた。」

以上の記述を読む限りでは、上記の 3 形式 (-x gež baj-, -x geed baj-, -xAAr zavd- / -xYg zavd-) は互いにほとんど同じような意味を実現するものであるかのように見える。そこでコンサルタントにこの 3 形式の間における機能の違いを尋ねたところ、次のような違いがあることが明らかになった。Garax gež bajna. を Garax geed bajna. に変えてみると、これは次のような意味になるという。

(36) Garax geed bajna. 「(出かけてはいけないと言っておいたのに) 出かけようとしている。」(コンサルタントによる作例)

(36) の文はモンゴル国では上記の訳のような意味だが、査読者と本稿のコンサルタントによれば、内モンゴルでは出かけようとする行動を「頻繁に」行うという意味を表すという。他方モンゴル国においては、その行為が行われる時間は頻繁であっても、今まさに行われようとしている将然のものであっても、どちらでもよいという。モンゴル国ではこの文において重要な含意は「出かけてはいけないと言っておいたのに」という部分にあるという。なおこの文は 1 人称が主語でも言えるという。すなわち、例えば話者の家族がカギを忘れたのででかけないでくれと電話で連絡して来たのに対して、「(私は大事な用事があって) 出かけねばならず、(今) 出かけるところである」ということを伝えるような場合にも発話することが可能であるという。すなわち聞き手に対して何らかの不満や、不本意に感ずることがあれば言えるのだという。

岡田・向井 (2006) が挙げていた上記の文も実際には次のようなニュアンスを持つという。

(37) Tamxi tatax geed bajna. 「(禁煙すると約束していたのに) 煙草を吸おうとしている。」

したがって -x geed baj- はその行為を行ってはならない、というような前提などがある状況で、その行為を行おうとしているのを目撃した場合に用いるということがわかる。なお自分でコントロールできない行為であれば、話し手自身の行為についても言うことができるという。

(38) **Untax geed bajna.** 「寝てしまいそうだ。／眠くてもうダメだ。」(コンサルタントによる作例)

ただし、この場合にも何らかの前提が必要であるという。例えば「今夜は起きていてレポートを書く
と決めていた」などのような前提がある状況でこそ使えるのだという。

これに対して、**-x gež baj-** を用いた **Garax gež bajna.** 「出かけるところだ。」や **Tamxi tatax gež bajna.** 「煙草を吸うところだ。」は単なる観察の報告であり、**-x geed baj-** が持つ上記のようなニュアンスはないという。

なお **-x gež baj-** は無生物主語による無意志的な行為でも、そのことが確実に起きることがわかっている場合であれば、使うことができるという。

(39) **Ter mod unax gež bajna.** 「あの木が倒れるところだ。」(コンサルタントによる作例)

コンサルタントによれば、上記の2形式に対し **-xAAr zavd-** は文語の形式で、もっぱら文学作品などで使われる形式であり、口語ではふつう **-x gež baj-** を使うという。

岡田・向井 (2006) 〈補助動詞〉は **-AAd üz- / -ž üz-** を「～してみる」のような意味を示すものとして記述し、次のような例文を挙げている。

(40) **Idež üzlee.** 「食べてみた。」

しかしコンサルタントによれば、どちらの副動詞形に接続するかによって、主語の人称に関する違いがあるという。

まず1人称が主語である場合とした場合であるが、その場合にこの文 ((41)) を聞けば、意味はわかるが、基本的にこのような言い方はしないという。しかしかなり苦勞してやっとのことで実現した場合などには、「(私は) 食べてみたよ!」という意味を込めて次のように言うことができるという。

(41) **Ideed üzčixlee.** 「食べてみたよ!」(コンサルタントによる作例)

これに対し、内モンゴルではこの文に対して次のような二通りの解釈ができるという。

- ① なかなか食べられないものを食べられて満足していること。
- ② 我慢できず食べてみてしてしまった。

さらに内モンゴルでは **Idečixlee.** だけでもこの二つの解釈ができるという。他方、モンゴル国では **tesexgüj / tevčixgüj** 「我慢できず」のような表現を前に加えないと、②の解釈は難しいという。なお①の解釈に関して言えば、モンゴル国でも文脈によっては「満足している」のニュアンスがでるといえる。渡辺 (1997) によれば、北米インディアンのセイリッシュ語族のコモックス語では、「苦勞の末に達成した行為」も制御不能の接辞が実現する意味であるという。したがって①と②の両方の意味を広い意味での制御不能とみることが可能であると考えられる。

アスペクトの語幹拡張接辞 **-čix-** 「～て しまう」を用いたこのような場合には逆に **-ž üz-** を用いることはできないという。

(42) ***Idež üzčixlee.**

したがって **-ž üz-** は逆に制御可能なことについてしか使えないものと考えられる。2人称主語の場合には、両方の形式を使うことが可能で、両者のニュアンスの違いはないという。

(43) **Idež üz dee! / Ideed üz dee!** 「食べてみてね。」(コンサルタントによる作例)

3人称主語の場合には、**-ž üz-** を使うのがふつうで、**-AAd üz-** はやや不自然であるという。コーパス

で検索してみると、-ž üz- が 844 例であるのに対し、-AAd üz- は 89 例（-aad üz-: 39 例、-eed üz-: 21 例、-ood üz-: 20 例、-ööd üz-: 9 例）であった（ここでもゴミがないわけではないが、目視した限りそれほどゴミは存在しなかった）。したがって使用頻度には 10 倍ほどの差があり、上記のように意味的に有標で使用に制限がある -AAd üz- はあまり使われていないということがわかる。

2.9. 否定の形動詞形 -sAngüj による連体修飾の可否

否定の形動詞形 -sAngüj による連体修飾に関して、岡田・向井 (2006) 〈連体節と形動詞形, 形動詞形 (1)〉は -aagüj と同様に「主文の述語のテンスよりも前に完了していないことを表しますが、「完了するはずの出来事が最終的に完了しなかった」というある種の価値判断を含んだ否定を表します」とし、次のような例を挙げている。

(44) cagtaa **irsengüj** ojuutan / cagtaa **ireegüj** ojuutan 「時間どおりに来なかった学生」

しかしコンサルタントによれば、-sAngüj による連体修飾に対する許容度は低く、次のように文に入れてみても、-sAngüj による連体修飾は変に感じられるという。

(45) *Cagtaa irsengüj ojuutan olon bajsan. (意図した意味)「時間どおりに来なかった学生がたくさんいた。」

実際に例えば -sAngüj の形式でコーパス (Mongolian Corpus) を検索しても、文末の例ばかりであり、連体修飾している例は見つからない。

これに対し、査読者の方は「この文は内モンゴルでは不自然ではない」というコメントを下したが、本稿の内モンゴルのコンサルタントもやはり自然であると判断した。しかも上記の意味はこの文で表現する方が自然であるという。したがって形動詞 -sAn および -AA の使用には方言差があることが確認できる。

2.10. 目的語節内における主語の人称制限

モンゴル語の形動詞形もしくは形動詞形の否定形がその後ろに格を直接とり、名詞項として機能することは広く知られている。岡田・向井 (2006) 〈名詞節(1)〉では以下のような例を示している（訳も岡田・向井 (2006) による）。

(46) cagtaa **irsengüjg** 「時間どおりに来なかったコトを (対格)」

(47) margaaš javax**güjg** 「明日行かないコトを (対格)」

(48) üxrijn max id**deggüjd** 「牛肉を (ふだん) 食べないコトを (与位格)」

このうち、形動詞形 -sAn の否定形による句を用いた文例をコンサルタントに作例していただいた。

(49) Cagtaa **irsengüjg** n' medsengüj. 「(彼が) 時間どおりに来なかったことを (私は) 知らなかった。」

(50) Margaaš javax**güjg** n' medsengüj. 「(彼が) 明日行かないことを (私は) 知らなかった。」

(51) Üxrijn max id**deggüjd** n' gaixsan. 「(彼が) 牛肉を (ふだん) 食べないことに (私は) 驚いた。」

これらの文をみるとわかるように、3 人称の人称小辞を用いた文ばかりである。しかも -sAngüjg の場合、3 人称の人称小辞がないと言えないという。

(52) *Cagtaa **irsengüjg** medsengüj.

これに対し、内モンゴルでは下記のように 1 人称や 2 人称を従属節の意味上の主語とした文や 3 人称を主節の主語とした文が言えるという。

(53) Ciniј Cagtaa irsengüјg medсengüј. 「(おまえが) 時間どおりに来なかったことを(私は) 知らなかった。」

(54) Minij Cagtaa irsengüјg ter medсengüј. (私が) 時間どおりに来なかったことを彼は知らなかった。」

一方、モンゴル国において -AAgüјg なら 3 人称人称小辞なしで、話し手についてのことを言うことができるという。

(55) Minij oĉoogüјg ter sonsson bol uu? 「私が行かなかったことをあの人は聞いたかなあ？」(コンサルタントによる作例)

(56) *Minij oĉsongüјg (n') ter sonsson bol uu?

これは完了の形動詞形 -sAn による否定形 -sAngüјg が、観察による事実を報告するという意味特徴を持っているためではないかと考える。ただし今後のさらなる研究を必要とする。

なお岡田・向井 (2006) 〈名詞節(1)〉では「モンゴル語の名詞節の意味が、日本語の「コト」・「ノ」・「モノ」のどれに相当するかは、文脈で判断することになります」と述べている。しかしコンサルタントは「人間」を指すこともできるという(ただし岡田・向井 (2006) が「モノ」という語を「人間」を含んだ意味で使っているのかどうかは明らかではない)。

(57) Cagtaa irsengüјg n' oruulaagüј. 「時間通りに来なかった人を入らせなかった。」(コンサルタントによる作例)

2.11. xojno による原因・理由の連用節における終止形の使用

岡田・向井 (2006) 〈連用節(2) 原因・理由〉は原因・理由の連用節を形成する形式の一つとして xojno 「後」を取り上げ、次のように記述している。すなわち、「xojno はくだけたスタイルでのみ使われます。このうち、xojno は判断の根拠を表す「～以上」に相当します」としている。次のような例を示し、さらに「xojno による形式の節の述語は、まれに終止形になることがあります」とし、終止形にした例も挙げている。

(58) Namajg xamt javax xojno ta juund ĉ bitgij sanaa zovooroј. 「私が一緒に行く以上、あなたは何も心配しないでください。」

(59) Namajg xamt javna xojno ta juund ĉ bitgij sanaa zovooroј. 同

しかしコンサルタントによると終止形にした上の文は言えないという。コーパスで -na/-ne/-no/-nĉ xojno で検索してみると、終止形が bajna であるものが 2 例のみ見出された。しかし、コンサルタントによればこれらの文でも bajna を形動詞形である bajгаа などにした方が適格な文になるという。

さらに上記の形動詞形の文では、従属節中の対格主語を主格主語にしても適格な文であり、むしろ対格主語の文の方が変に感じられるという。xojno を jum ĉin' にした方が、さらに主格主語で言いやすい文になるという。

(60) Bi xamt javax xojno ta juund ĉ bitgij sanaa zovooroј. 「私が一緒に行く以上、あなたは何も心配しないでください。」(コンサルタントによる作例、javax はやはり形動詞形である)

ただし査読者によればこの文は内モンゴルではあまり耳にしない表現であるという。本稿の内モンゴルのコンサルタントもやはり同様の判断をした。内モンゴルでは次のように言うのが自然であるという(モンゴル文字からの翻字による、下線と太字は筆者による)。なお同様の表現はモンゴル国でも特に口語においてよく用いられるという。

(61) Bi qamtu yabuqu yum ĉini ta yayun-du ĉu bitegei sanay_a jĉbayarai.

2.12. 目的を示す連用節 V-xYn tuld における主語

岡田・向井 (2006) 〈連用節(3) 目的〉は「目的を表す連用節は、動詞の副動詞形ではなく、次のような接続形式によって表されます」とし、次のような4種類の一連の諸形式 (V-xAAr, V-x gež, V-x geed, V-xYn tuld) を示している。さらに「事物などが主語となる無意志的な動詞の場合 (『～するように』) は、-xYn tuld 以外には接続しにくくなります」と記述し、次のような例を示している。

(62) Us xurдан buclaxyn tuld galaa čanga deer tavilaa. 「水が早く沸くように強火にしました。」

しかしコンサルタントによればこの文は不自然であり、buclax 「沸く」を他動詞 bucalgax 「沸かす」にして次のように言わなければならないという。

(63) Us xurдан bucalgaxyn tuld galaa čanga deer tavilaa. 「水を早く沸かすように強火にしました。」(コンサルタントによる作例)

岡田・向井 (2006) 〈連用節(3) 目的〉は -xYn tuld に関してさらに次のような例を挙げている。

(64) Margaaš öglöö xožigdoxgüjn tuld serüülegee tavilaa. 「明日の朝遅刻しないように目覚ましをかけました。」

この文の従属節の主語と主節の主語が異なるように書き換えると、やはりそれも非文になるという。

(65) *Margaaš bi öglöö xožigdoxgüjn tuld minij eež serüüleg tavilaa. (意図した意味) 「明日の朝私が遅刻しないように私の母が目覚ましをかけました。」

したがって -xYn tuld はそれが形成する従属節と主節の間で異主語となることを許容しない、言い換えれば同主語の節どうししか接続できないものと考えられる。

3. おわりに

昨年からのコロナ禍により現地調査による言語研究の実施の難しい状況が続いている。こうした状況下にあつて、幸い身近にコンサルタントの方がいらっしゃるの、今後もモンゴル語について研究しつつ、可能であれば今後もこのようなモンゴル語文法研究ノートを書き続けて行きたいと考えている。本研究ノートのタイトルを「モンゴル語文法研究ノート (1)」としたのはそのような理由による。モンゴル語研究者としては全く駆け出しであるが、他の言語からの対照的な視点から気づくこともあるのではないかと考えている。特にモンゴル (諸) 語を専門とされる研究者の方々から少しでも御批判・御叱正をいただければ幸いである。

時間を割いて例文の適格性を判断し、作例をしてくださるとともに貴重なコメントを下さったコンサルタントの方々に深くお礼申し上げたい。貴重なコメントを下さった匿名の2名の査読者の先生方にも深くお礼申し上げたい。ただし本稿における一切の誤謬は筆者の責に帰するものである。

参考文献

恩和巴图. 1983. 『达汉小词典』呼和浩特：内蒙古人民出版社

Göksel, A. and C. Kerslake. 2005. Turkish A Comprehensive Grammar, New York: Routledge.

日高水穂. 2006. 「第5章 文法化」小林隆 (編) 『シリーズ方言学2 方言の文法』181-219. 東京：岩波書店

Janhunen, J. 2012. *Mongolian*. Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins.

風間伸次郎 (2016) 「地域的・類型論的観点からみた無生物主語について」北海道大学大学院文学研究科
北方言語ネットワーク(編) 『北方言語研究』 6: 81-110.

Kullmann, Rita and D. Tserenpil. 1996. [2006 (第 4 版)] *Mongolian Grammar*. Hong Kong. Jenso.
Ltd. (第 4 版は Ulaanbaatar: Admon Co., Ltd.)

岡田和行・向井晋一. 2006. [2016 改訂]. 「東外大言語モジュール：モンゴル語文法モジュール」
<http://www.coelang.tufs.ac.jp/mt/mn/gmod/steplist.html> (最終閲覧日 2020/12/20)

小沢重男. 1983. 『現代モンゴル語辞典』東京：大学書林

小沢重男. 1997. 『蒙古語文語文法講義』東京：大学書林

塩谷茂樹・中嶋善輝 2011. 『世界の言語シリーズ 3 モンゴル語』大阪：大阪大学出版会

竹内和夫 1989. 『トルコ語辞典』東京：大学書林

Tsintsius, V. I. i dr. 1975. [tom 1]. *Sravnitel'nyj slovar' tunguso-man'chzhurskikh jazykov, Materialy k etimologicheskomu slovarju*, Nauka, Leningrad.

渡辺己 1997. 「本土コモックス語における他動性とアスペクトにかんする一考察」環北太平洋の危機
に瀕した原住民言語の類型と歴史に関する国際共同研究研究会レジュメ

山越康裕 2012. 『詳しくわかるモンゴル語文法』東京：白水社

研究資料

Mongolian Corpus: <http://web-corpora.net/MongolianCorpus/search/> (最終閲覧日 2020/12/20)

TS CORPUS: <http://tscorpus.com> (最終閲覧日 2020/12/20)

執筆者連絡先：kazamas@tufs.ac.jp

原稿受理：2020年12月23日